

齊藤茂吉全集

第二十四卷

(第十二回配本)

昭和二十八年四月十五日 第一刷發行

齋藤茂吉全集 第二十四卷

定價四百三十圓

著者

齋藤茂吉

發行者

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田一雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三
株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・牧製本

目次

正岡子規	一
正岡子規	九
正岡子規の歌	五九
正岡子規の歌論	八三
後記	一七一
正岡子規	一七三
子規の歌論に就て	一九一
正岡子規小感	一九五
竹の里人雜感	二〇二
噺囀の讀方其他	二一〇
子規の歌一首	二二三

伊藤左千夫先生が事ども	三九
先師の歌三首	二四四
左千夫の歌一首	二四七
伊藤左千夫の追憶	二五三
伊藤左千夫の歌	二六七
伊藤左千夫	二七二
森鷗外と伊藤左千夫	二八四
根岸短歌會と伊藤左千夫・長塚節	二九〇
長塚節の初期の歌	三〇三
長塚節の歌	三〇九
長塚節	三二四
長塚節	三三七
長塚節	三四一
長塚節の歌	三六〇
島木赤彦君	四三三

歌道小見	四三七
赤彦君の歌	四三九
赤彦君の寫生說	四四一
島木赤彦	四四三
後記	一

正岡子規

目次

正岡子規……………九

其一 正岡子規略傳

其二 俳句革新 新體詩 和歌革新 寫生文創成 病牀隨筆文學 子

規の性質の一面（野心の説 疾病慰樂の説其他）

其三 寫生主張 寫生と理想と 寫生の用語例 松葉の露連作十首

春水鯉魚十句 連作といふこと

其四 子規の文學論の根柢 芭蕉子規句風比較 製作態度二種 苦心

の据所

其五 子規の疾病觀 子規の死生觀及び子規の死 子規の娑婆的文學

其六 子規の芭蕉燕村評 晩年の句評 俳論の過程 應舉吳春評 藝

妓舞踊觀

其七 晩年の俳句 同題俳句和歌 俳句の形式と和歌の形式 辭世の

三句

其八 和歌革新運動 和歌に對する考の變遷 短歌の實例 長歌の實

例 結語

正岡子規の歌……………五九

一 和歌革新運動 百中十首 『新』といふこと 『變化』といふこと

新内容 新句法 口語調ハガキの歌

二 『象蛇どもの泣き居るところ』『今の寫眞は年老いにけり』『古へ

人はよくかきにけり』 與謝野鐵幹の「東西南北」卷頭作との比較

『皆眼の下に花咲きにけり』『戀ひこがれしといふものがたり』等

三 理想と寫生 『曇りぬぐへば足袋ほせる見ゆ』『雪ふりつみて木に

つもる見ゆ』『家鴨飼ひたるきたなき池あり』『針やはらかに春雨

の降る』『鉢の牡丹の花ゆれやまず』等の作

四 一題數首の歌 連作の歌 松の葉の露十首 月夜十首等

五 藤の花十首 ゆく春十首 山吹十首 ほととぎす十首 墨汁一滴

の寫生說等

六 紅梅の歌 つくづくしの歌 おくられものくさぐさ 門人等

七 長歌について

造花 簍へ 東宮御婚儀を祝する歌 煙 格堂に贈る 觀兵式の歌

鷗齋 煮兎憶諸友 おくられものくさぐさ 旱の歌 花と旗

正岡子規の歌論……………

八三

一 革新的氣運

棒三昧 新派の起原（鐵幹） 東西南北序文 文界八つあたり 病
牀六尺第三十七 懶祭書屋俳話 宮内省派と海上派 歌よみに與ふ
る書 愚庵和尚宛書簡 落合直文宛書簡 五百木飄亭宛書簡

二 和歌と俳句

文學漫言 和歌と俳句との調和 三十一文字の高尙なる俳句 百中
十首の實例 俳調 俳調離脱について 久良岐宛書簡 實作例 晩年
に於ける和歌俳句一如の境

三 歌の趣向（意匠・内容）

趣向と言葉 趣向尊重 歌よみに與ふる書 舊派の國歌と新派の國
歌 外國文學思想の輸入 内容の豐富嶄新變化 理窟と感情 主觀
的佳句と客觀的佳句 寫生と理想

四 歌の用語

用語區域の擴充 『漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆

歌の詞と可申候』『何語なりとも皆平氣に恐れ氣もなく使ひすてしこと恰も萬葉時代の歌人が爲したると同じくす』『用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用うる積りに候』

五 歌の調

内容に順ふ調の變化 形式の約束による歌の調 曙覽の歌の調と元義の歌の調 頭重脚輕等 歌の發達史に本づく調 萬葉調古今調等『萬葉集を模するのが善いと思ふ人は模するが善し 模するのが惡いと思ふ人は別に自分の面白いと思ふ歌を作るが善し』

六 萬葉集

萬葉尊敬 萬葉の精神 眞淵・魚彦・曙覽と萬葉集 『萬葉の作者が歌を作るは用語に制限あるにあらず、趣向に定規あるにあらず、あらゆる語を用ゐて趣向を詠みたるもの即ち萬葉なり』 田安宗武と萬葉集 平賀元義と萬葉集 萬葉學者とその作歌 「萬葉集を讀む」中の語 「根岸夜話斷片」 「病牀歌話」

七 寫生

寫生に關する子規の用例 松葉の露の歌 鳥羽僧正の繪について

病牀六尺中の語 香取秀眞宛ハガキの歌 寫生と理想（病牀六尺）
子規鐵幹不可竝稱論 落合直文の歌の評 雜報的表現と寫生との區
別 單純化 模樣的 幾何學的 日本舞踊 能 鐵幹晶子の歌との
比較 ゲエテ對話抄 寫生と寫意 寫生の弊害と理想の弊害 實作
例

八 未來への暗指

進取的 退嬰的 竹里歌話中の語 墨汁一滴中の語 獺祭書屋俳句
帖抄序文 『自分の句は自分が輕蔑して居つたよりも更に下等なも
のである』 伊藤左千夫の語 『察するに子規子辛に天壽を得たりと
するも、遂に自己の満足を得る能はざるに終りたるべし。何となれ
ば子規子は偉人なればなり』

後記

一七一

正岡子規

其一

正岡子規は慶應三年九月十七日、伊豫國松山市新玉町に生れ、明治三十五年九月十九日、東京下谷區上根岸に歿した。年を享くること三十六。父隼太、母大原氏八重、幼名處之助ところのすけ、また升のぼる常規つねのりはその本名である。

子規は生前嘗て（明治三十一年）墓碑銘の如きものを書いたことがある。『正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊豫松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十圓』（ホトギス第六卷第四號アルス版子規全集第十三）。この文の寫眞版が世に出でたとき、森鷗外も目にとめた見え、『遺言には随分面白いのが有るもので、現に子規の自筆の墓誌杯も愛敬が有つて好い。樗牛の清見瀉は崇高だらうが、我々なんぞとは、趣味が違ふ』（妄人談話）といふ評語を下したことがあ

る。なほ子規には、莞爾生、花盗人、沐猴冠者、獺祭魚子、放浪子、馬骨生、虛無子、痴夢情史、丈鬼、披襟生、河野狀稀、蕪琴、うかれだるま、うすむらさき等の別號がある。號の由來に就き子規みづから記した文章がある（子規全集 第十三卷）。

子規。咯血して時鳥の句を作る。これより名あり。規は實名の一字なり。或は杓子定規を縮めたる語と見るも面白からん。

獺祭書屋。李義山文章を作るに、多くの参考書を座右に散らかし置く。人之を見て、獺、魚を祭るが如しといふ。獺祭魚は禮記月令に在り。我の書齋、書籍縦横に亂れて、蹈むに處無し。因つて此號あり。獺の音、人多く誤り讀む。獺の音は「だつ」なり。獺祭は「だつさい」。獺は「ひんだつ」。

越智處之助。越智は我系圖的姓なり。處之助は生れし時の通稱なり。こは父の鐵砲の師より特に與へられたる名なれど、外祖父は「此名よろしからず、學校へも行く年にならば、ところてんとところてとなぶられんか」とて、升のぼると改められしは我四五歳の時なるべし。

升。「のぼる」と讀む。易の地風升などより思ひよられたるにや。我も地風升として雅號に代へたる事あり。以上二つは通稱なれども、今は通稱といふ者戸籍上に省かれたれば、

雅號の一種とも見るべきか。

竹の里人。根岸を竹の根岸といひ初めし人ありけるに、我も寓居の地なれば斯くなん。

其他臨時の名は説明の限にあらず。

子規は明治十六年松山中學を中途退學し、上京して共立學校に入學した。明治十七年に一ツ橋の大學豫備門に入學した。大學豫備門は明治十九年に第一高等中學校と改稱された。明治二十二年に咯血して子規と號した。このあたりから俳句の研究に熱中した。明治二十三年六月第一高等中學校を卒業して、九月に文科大學に入學した。此年俳句分類に志し、俳句文章俳論等の發表が多い。明治廿五年九月に大學を退學し、十二月日本新聞社に入社した。明治二十八年三月日清役従軍記者として金州に至つたが、五月歸國の舟中咯血して神戸須磨に靜養した。明治二十九年から歩行の自由やうやく利かず、證候漸進して歿年に及んだ。子規の文學の圓熟したのはこの病牀に於ける六七年の間に於てであつた。

近時、改造社から出版された子規全集の卷十八には、「子規居士年譜」が附載されてゐる。この親切丁寧な年譜によつて、正岡子規生涯の行爲出來事の全豹をうかがふことが出来る。

參考書。子規全集（アルス版）全十五卷

自大正十三年
至大正十五年

子規全集（改造社版）全十八卷

自昭和四年
至昭和六年